

国立西洋美術館の歴史

国立西洋美術館は、造船王にして美術品収集家の松方幸次郎（1866 年－1950 年）の名にちなむ松方コレクションを収蔵、展示するために設立されました。幸次郎は華族である松方正義元首相（1835 年－1924 年）の子息で、米国で教育を受けました。その後、幸次郎は川崎造船所社長としてひと財産を築きました。同社は第一次世界大戦（1914 年～1918 年）時に日本海軍向け造船という非常にもうかる事業で利益を上げました。当時、川崎は拡張路線をとり、需要先の発注を待つのではなく、レディメイドの船舶を造ってそれを売りさばくという手法を選択しました。この戦略とそれに必要な攻めの営業活動のために 1916 年にロンドンを訪れた松方は、その地で美術品の収集を始めました。

実業家にして愛国者の松方は、「芸術のための芸術」にしておく気はありませんでした。それよりも、自分の財産を活用してコレクションを収集し、それを日本の芸術家や目の肥えた芸術ファンのために日本で展示することを願いました。この夢は、軍事、経済、文化などあらゆる分野で西洋に「追いつく」ための日本の取り組みという、当時の時代背景から理解することができます。松方は、西洋美術館の創設は同胞が「西洋の人々の心性を理解する」役に立つだろうと賭けたのです。

1916 年から 1926 年にかけて、松方コレクションは美術品 1 万点以上に膨れ上がりました。

これにはヨーロッパの油絵、彫刻、タペストリー、家具の多彩なセレクションや、19 世紀

後半に海外の買い手が取得して国外に流出した約 8,000 点の浮世絵が含まれます。美術品を日本に輸送するためのコストがきわめて高くついたため、松方は貴重な数多くのコレクションの大半をロンドンとパリに保管しましたが、いつかは美術館を創設するという夢はあきらめませんでした。

しかし、この夢は 1927 年についえたように見えました。その年、金融恐慌が襲い、川崎造船所の最大の債権者である十五銀行が経営破綻しました。松方は会社を救うために、美術品を含む個人資産の大半を担保に入れなければなりませんでした。松方コレクションは散逸

しました。日本で保管されていた美術品は次々に売却され、ロンドンで保管されていたものは 1939 年の火災で失われました。フランスにとどまった約 400 点は第二次世界大戦を乗り切りましたが、その大戦の末期にフランス政府が「敵国人財産」として差し押さえました。

1950 年代初めに日本政府とフランス政府の間で松方コレクション返還交渉が開始されました。両政府間で最終的に取引がまとまりました。フランス政府は、収蔵のための美術館を建設する約束と引き換えに、美術品の大半を日本に戻すことに同意しました。この約束は 1959 年の国立西洋美術館開館へとつながり、遅ればせながら松方幸次郎の夢が実現しました。